

言を吐くといふやうにもなるのである。

精神の健康なる人でも、記憶が不故意に性質を變化することがあつて、それがために虚言を吐くといふ場合もある。この種類の虚言は、近頃、陳述の心理の研究が進歩したので、明になつたのであるが、すべての人は、一定の事件に遭遇した後一定の時日を経ると、それに就ての記憶は次第に不正となり、又は消散するものである。それで一個の事件を度々報告するといふ場合に方りて、その陳述が、漸次に變化するといふことは間々有ることであるが、これは勿論病理的虚言では無い。

此の如き、病理的虚言を吐くものは、精神の異常、又は異常と健康との境界にあるもので、ヒステ

リー、癲癇、精神病的低格者、精神薄弱等に多くこれを見る。生後に精神薄弱となつたものにも、これを見ることが多くある。

病理的虚言の本性は、此の如きものであるから、右のやうなものを證人として、陳述の正偽を判するの資料に供するといふことは危険である。裁判所で、證人としての陳述を聴くには、十分この點に注意せねばならぬのである。

精神の異常に本づける虚言者を處置するは、精神の尋常なるものと同様に、小供の時代から、教育に注意して、殊に觀察を明確にすること、記憶を再現することを明確にすること、陳述を正しくすること等に、重きを置いて、訓育するを肝要とする。

獨逸に於ける幼稚園改良問題

文學士 上野 陽 一

幼稚園の始めて設けられた本國の獨逸に於て、

近頃如何なる改良問題が論せられて居るかを御紹

介したいと思ふ。固より我が邦の幼稚園と獨逸のとは、その性質が大に違ふとは申しながら、彼地に於ける改良意見も亦、他山の石として参考にもなり、興味も尠からぬことであらうと思はれる。こゝに紹介するのは、ミュンヘンの私講師をして居られるアロイス・フイツシャーといふ人の意見で、「實驗心理學及び實驗教育學雜誌」の本年一月號に載つて居たものである。

一 教育行政上の問題

幼稚園に關する教育行政上の問題とは、畢竟幼稚園をおくかおかぬかの議論である。一派の考では幼稚園は已むを得ぬ産物に過ぎない、經濟上の事情や、それに原因する家庭生活の破壊などのために、多數の子供は當然の安息所たる家庭に在つて、日々兩親の感化を受け、家庭の温みに浴することが出来なくなつた、子供に教育を施すことは當當兩親の役目であるのに、經濟上や慣習上の事情のために、それが出来ないといふことであるな

らば、社會は又當然の義務として、兩親に代るべきものを設けなければならぬ。幼稚園はつまり家庭教育の代りとして作つたものである。故にそれが改良を計り、延いて間接にその普及を促すのは少しも理由のない有害なことである。須らく幼稚園の如きものに對しては十分の制限を加へなければならぬ、でないといふと、現に自ら子供の世話をしつゝある親達までも、子供を幼稚園にあてがふやうになる虞れがある。つまり幼稚園は公教育制度の一成分と見做すべきものではない、隨つて慈善的の性質を無くするのは悪いとかういふのである。之に反對するものゝ考へによると、經濟上及び社會上の事情のために、幼稚園が必要になつて來たので、今更幼稚園に制限を加へた所で、それ等の事情を除くことは出来ない。幼稚園を排斥したとしても、將に消え去らんとしつゝある家族觀念を恢復することは出来ない。寧ろ兩親が毎日外に出て働かねばならぬやうな家族にとつては、實に必

要なものである。そのみならず、子供を養育するにつけて、物質上のことには困らないけれども、精神上道徳上の手段に缺けて居る人、又大都市などに見る如く、教訓、模範等を示すには事缺がないけれども、子供を遊ばせる場所、設備、友達などの乏しいために困つて居る人、これ等の人々にとつては、誠に必要なものである。次に、子供は成るべく早くから幼稚園のやうな所に入れて團體生活をさせなければならぬ、これは決して父母が教育上の責任を免れるためにいふのではない。小さい時から社會的の生活に慣れさせ、一致協力の思想を養ふためであつて、特に「一人子」のためには、是非共幼稚園の如き所に於て、同年輩の友達と遊ばせることが必要である。四歳から七歳までの子供は同年輩の子供と遊ぶ需要を感じるのみでなく、當然その權利を有つて居るものである。して見ればもつと幼稚園を發達させて、誰でも子供をこゝに托すことの出来るやうにするのが至當で

はあるまいか、それには幼稚園は慈善的設備であるといふ考をすて、之を學校系統の一部に組入れるのが良い。又あまりに子供を大切に過ぎる風潮に對しても、子供を幼稚園に出すことは、極佳い對療法である。あまり可愛がり過ぎて世間に出さずにおくと、依頼心が克つて獨立心が發達しないやうになる、それにはどうしても、私設でない公設の幼稚園が必要であるといふのである。

以上の爭論は、多少の變更を加へれば、日本に於ても、同じことがいへるのであつて、獨逸の學校系統の沿革に於ても、誠に古い問題であります、今日に至るまで未だに解決を見ない新しい問題であります。

二 組織上の問題

これは各幼稚園に於て共同的變化を施すか、それとも、組を分けるのが良いか、幼稚園と尋常一學年との連絡は如何といふ問題であります。最低年齢如何の問題もこれに屬して居る、組を分ける

ならば同年齢のものを以て組を組織すべきか、又相互教育のために、一組の中に異年齢のものを混せた方がいゝかといふ問題もある。男女を分けてはいけないといふことは、経験の結果明らかである。小學校との連絡は特に慎重に研究を要することゝ考へられる。

幼稚園の方では小學校の豫備をする考へはなくとも、實際に於て豫備となることは免れません。二三年も幼稚園に通うた子供と、さうでない子供とは、假令同じ位な階級に屬して居るものでも、その習慣に於て、知識に於て、技能に於て、又仕事を好み、被教化性に富んで居る點に於て、餘程違ひがある。大都市の子供で幼稚園教育を受けたものになると、更に直觀が豊かだといふ特色を持つて居る。随つて大都市に於ける小學校初學年の教材は餘程違つて來るであらう。そこで兒童數の多い都市に於ては、小學校初學年を二種に分けて、幼稚園出身のもの、さうでないものとを區別す

るの可否といふことも問題になつて來る。

併し以上の諸問題は今日まだ決定して居らぬ。

大都市に於ける幼稚園出身兒の實數如何について信すべき統計が無いからである。今後は各兒童の在園期間及び主なる作用について記録する事にしたいと思ふ。又小學校の男教師は幼稚園を正當に評價して居ない。婦人だがん／＼小學校にはいつて來て、男子の職業を奪ふ手始め位にしか思つて居らぬ。とても幼稚園が小學校の豫備をするといふやうなことはない。つまりそれほど眞面目視されて居ないのである。大抵の教師は幼稚園の教育を受けたからとて子供の被教化性は少しも影響を受けないといつて居る、又却つて悪い影響を受けるといふものもある。何れにしても、この組織上の問題を決定するには、公平なる立場から比較研究して材料を集めなければならぬ。小學校初學年の敎則案や目的などを幼稚園の上に築いて行くには、どうしても幼稚園を義務的のものにしなけ

れば出来ないことである。且又凡べての幼稚園を同じ組織で行はなければならぬことになる。

所が幼稚園保育のお蔭で良い習慣もつき、仕事も好きになつて居たものが、小學校にはいると、少しも豫備教育を受けて居ないものと一緒にされ、その結果、少しも進歩をしないのみでなく、知識や技能が著しく退歩して却つて豫備教育を受けないものに負けるといふやうな事實が尠からずある。

今この事實を捉へて、その罪を幼稚園に歸し、一概に價値のない有害のものだといふて仕まふのは誤りである。幼稚園に長く居れば、仕事の方法にも慣れ、教師との親しみも出來て、すつかりその境遇に順應して仕まつて居る。その兒が幼稚園を去つて小學校に入るに當つて、小學校の方では、

在園中の子供の境遇を丸で無視してしまふ、尤も入學兒童の大部分は、幼稚園を経ないものであるからして、無理はないといふものゝ、それでは折角幼稚園で始めた仕事も急に中絶されることに

なり、教師との關係も丸で調子が違ひ、子供に取つては途方にくれた感じがすることであらう。要するに兩者の間に連絡がなく、新しい境遇に順應することが出來ないために、從來の知識は無くない、新しい知識は増さず、さてこそ他の子供にも負けるといふやうなことになるのである。これは決して悲觀に過ぎた言ひ草ではない、小學校にはいつてから、先生が變つたけれども成績が悪くなるのではないか、それと根本に於ては少しも違ひはない。たゞ教師が違つただけでさへ、さういふ影響があるものを、幼稚園から小學校といふ丸で空氣の違ふ世界にはいつて、何かの影響がなくてすむ筈がないのである。

三 教育方法上の問題

これは幼稚園改良問題の中で一番困難なものである。遊戯及び自由作業といふことゝ、組別けの要求及び次第に學校式の課業に移らしむることを調和すること、又自發活動と外部からの興奮とを調

和するとは比較的容易いことで、それには精神物理的發達の程度の同じものを際めて組を作ればよいのである。併し上下の階級をつけて、嚴に組を分けるのは、學校式の組織を眞似たもので、幼稚園を學校視する危険がある。保育の方法については、從來いろ／＼爭論されたけれども、直觀教授を以て基礎としなければならぬことは確められて居る。又どうして直觀されるか、その直觀を明らかにし、一般概念を作り、之を印象せしめるためには、如何なる發表方法を取らねばならぬかについても、少くとも原理に於ては決定して居る。又大都市の幼稚園は特に子供を天然と親ましめ、簡単な手工を覚えさせ、成るべく田舎の子供と比べて、足りないと思ふ點を補うてやるやうにせねばならぬ。この點は近來學校を以て勤勞學校となさんとしつゝある運動の影響と見ることも出来る。

かくの如く獨逸の幼稚園制度は、歴史上から見、又事實から見て、フレibelと深い關係を有つて

居るけれども、幼稚園改良の中心問題は何かといへば畢竟「フレibelか非フレibelか」といふことである。而かもこれは教育の任務如何といふ點から見て、この疑問が起つて來るのである。即ち男兒などにとつては、幼稚園教育は一種の屈從壓迫である、かしまつた座り方をして、眞面目な歌を歌はせられることは、子供にとつては自分の尊嚴を傷けるやうな窮屈さを感じるに相違ない。その結果、謂はゆるフレibel式なるものに對して忌み嫌ふやうになつたのである。加ふるにそれが情操の陶冶、意志鍛鍊の方法として價值があるかどうか頗る疑はしい。謂はゆる徳の養成なるものも、畢竟偽善に陥らしめる憂ひはないかといふ風に案じられて居る。

フレibel式教育がかくの如く一般の不信用を來たしたのは、果してフレibel自身の考の誤であるか、若くは之を複述したもの（主として女子）の誤りであるか、今それを論じて居る違はない。

又子供の教育をもつと自由な、束縛のない、活潑なものに組織しやうとする運動についても、細論する違はない。オットー・グルリット、モンテッソリー、フヘルニーの諸氏は、幼稚園改良についての意見やら實例やらを澤山提供して居る。要するに、現今幼稚園改良の根本問題は「フレーベルか非フ

小兒の傳染病（その二）

△麻疹

麻疹は子供に限つた病氣ではなく、どんな時期でも、年寄でも、誰れでも罹る筈のものであります。然るになせ子供に多いかと云ふと、大抵子供の時に一度罹つてしまつて、免疫を得て、もう大人になつて、からは再び罹ることがないからさう思はれるのであります。而して大抵の人は一度は罹るべき病氣で、非常に多く擴がつて居る病氣で

レーベルか」に在るとを忘れてはならぬ。

氏は以上の諸問題を解決するために、盛に私立幼稚園を興して研究し、當局者の優柔なすなきを刺戟してやらなければならぬ。されば幼稚園もその面目を一新して延いて家庭教育のためにも光明を與へるであらうといつて居る。

醫學士 石 塚 保 吉

あります。明治天皇には一度もお罹りにならなかつたと申すことであります。

此の病氣の流行する時期は定りがありません。殊に都會などは一年中あります。併し特に多い時期は寒い時の方です。これは寒い季節は氣管支カタル感冒等が多くあつて、傳染に都合がよいからであります。

麻疹は一度罹れば、二度と罹ることはないとし